2021.11.14　愛媛県松山市　道後上人坂・ひみつジャナイ基地
古川友紀《ひみつの散歩》

愛媛県松山市が取り組むSDGｓ事業の一環として行われた、古川友紀さんのアートプロジェクト《ひみつの散歩》においてアーカイブ映像の撮影スタッフとして参加。その後、プロジェクト成果をまとめた冊子『歩録　道後・上人坂編　「ひみつの散歩」』（古川友紀・越智雄磨）にエッセイを寄稿。

歩く、走る、止まる、座る、寝転がる、隠れる、描くといった行為とその場所の地質的特性や道後の遊郭の跡地という歴史性を身体を通して感じ取るプロジェクト。映像撮影では、身体やナラティブ、土地が触れ合う感覚を捉えることに努めた。エッセイでは、イヤホンやスマホという情報を拡張しつつ遮断する装置を常態する自身の身体感覚が、ワークショップによってどのように反応していたかを綴った。

2022.8.24　愛媛県松山市
愛媛大学南加記念ホール

映画「虹色の朝が来るまで」
上映会＋トークディスカッション

愛媛大学人文学会の学生委員として企画したイベント。今井ミカ監督《虹色の朝が来るまで》の映画上映会を開催し、トークディスカッションにも登壇した。映画会社や地域の当事者団体、アクセシビリティ支援室の担当者と協働し、文字通訳と手話通訳の情報保障の確保、広報、企画運営を担当。愛媛大学（現、東京都立大学）の越智雄磨先生にサポートいただいた。登壇者には、トランスジェンダーをカミングアウトして活動するわたなべひろゆき松山市議、社会保障法を研究する愛媛大学の鈴木靜先生、ひきこもりなどを研究をする松山大学（現、立教大学）の石川良子先生の3人をお招きし、それぞれの位置からの議論を重ねた。

聴覚障がいをもつセクシュアルマイノリティが題材の映画の鑑賞体験を通し、その場で観客のアンケートを参照しつつ、交差性の観点から、当事者と非当事者という境界、問題を語る主体とアイデンティティの複雑さについて議論した。「彼ら」「私」「私たち」という自己や他者の位置関係とヘテロセクシズム、優生思想、表象における可視化と不可視化などの問題を認識した上で、どのように連帯、あるいは行動していくのかという意識を参加者と共有した。

2022.9.25　愛媛県松山市　ケミビル705号室
《禍福は巻かれる卵の如し》

参加者の5日間の日記をもとにしたレシピ帳から、禍は塩、福は砂糖に変換・味付けした卵焼きをつくり、互いに食べることでシェアするというワークショップ。私たちは、アビリティやエスニシティ、ジェンダー、年齢など、交差する複雑な差異があり、どんなにわかり合おうとしても他者の感覚は想像しかできない。言語や視覚が支配的である現状のコミュニケーションシステムで十分なのかという疑問が湧いてくる。「味覚」という感覚を追加することで、オルタナティブなコミュニケーションと関係性を探る。

私たちは日々をどのように捉えているのだろう？ 「禍福は糾える縄の如し」ということわざがある。 良いことも悪いことも縒り合わせた縄のように訪れるらしい。5日間でどれほどの平衡感覚を維持していて、それはどんな味がするのだろう。 共に生きるためにどのような仕方でわかり合えば良いのだろう。「頂きます」と「ご馳走様でした」のひとときから味わいたい。

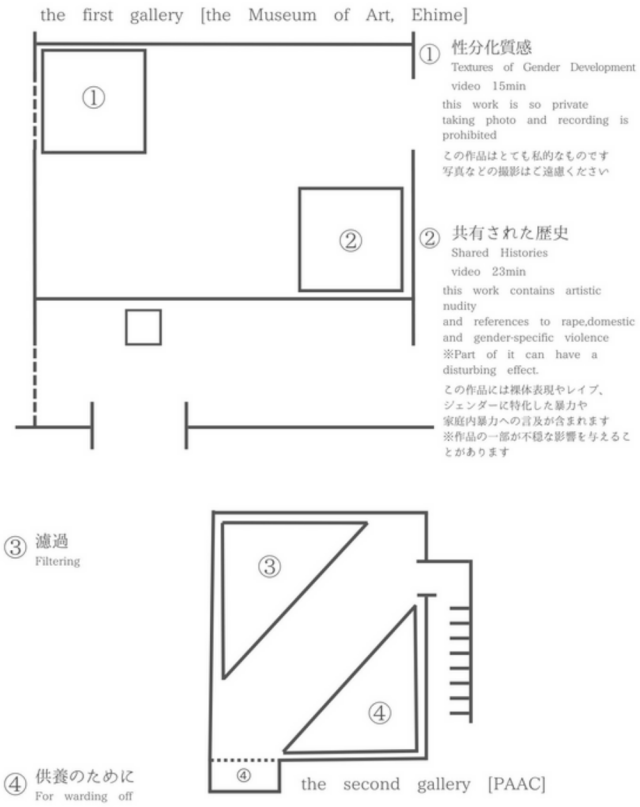
2023.2.19-26　愛媛県松山市道後　poncopipin 2階ギャラリー
《性食考》映像・インスタレーション

民俗学者の赤松憲雄さんの書籍『性食考』から名前をとり、口をモチーフに、性と食に関する映像とインスタレーションを制作。食には、自己の生命を維持する生存のための機能と、同時に他の動植物の生命を奪うという両義性がある。食事や会話だけでなく、キスや性行為、髭剃り、口紅など機能に幅のある公私の曖昧な局部である。

また、コロナ禍でマスク着用が義務化され、私的領域の方へと大きく傾いた。制度による社会構築主義的な身体感覚の変容、それに伴う既存の身体の意味作用の揺らぎ、性と食をとりまく規範と身体の関係を強調し、ASMRの形式を用いて不快感や違和感を引き出すための映像を制作した。

天井からは内臓や革、性を連想させる黒い帯をたらし、体にまとわりついたり、ゴムやアルコールのすえた臭いが広がる。空間には、文章とASMRを撮影するための機材を設置し、映像を鑑賞した後に、カメラの前に座ることで、液晶に自身の口や顔が映し出され、違和感や居心地の悪さを生じさせる仕組みを用意し、不快の所在を探るように鑑賞者の身体への干渉を試みた。

イベントとして、ギャラリー階下のバーにてスパイスカレーを作り、それを鑑賞者に振る舞った。食べる行為や飲む行為、その鑑賞体験について話すという行為が口という器官を意識的に通り、自己や他者の境界がゆらぐことを感覚的に共有できるように構成した。



2023. 11. 1-6　愛媛県松山市
①愛媛県美術館　②平和通りアートセンター

個展「習い性となり　躓く／Habit Becomes a Sexuality Stumbled Upon」

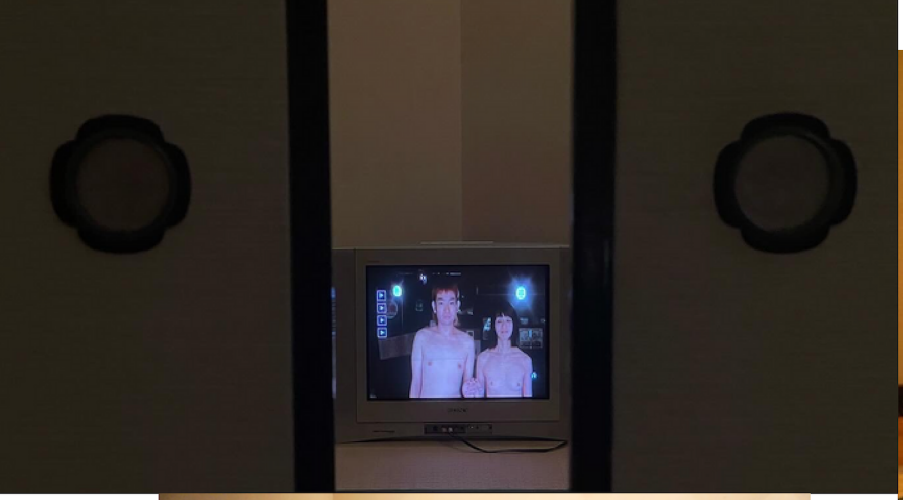
ー展示ステイトメントー

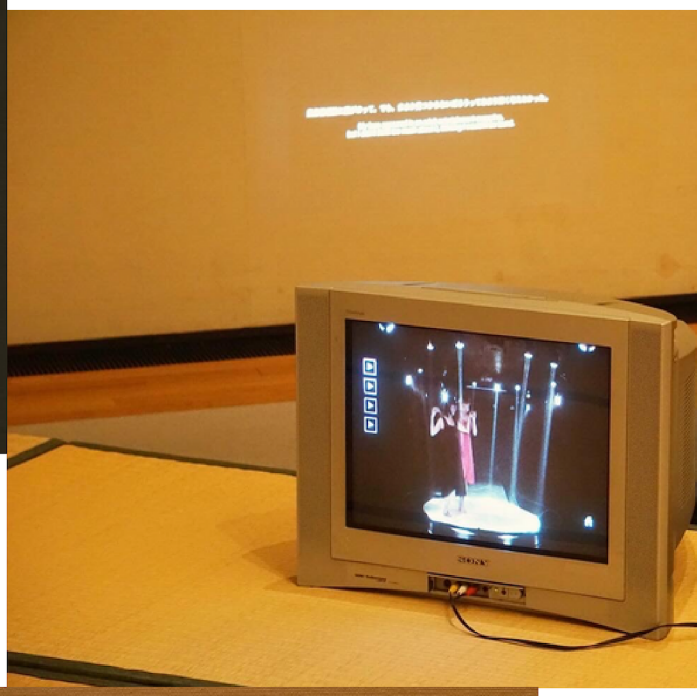
「習い性となる」という言葉は
「習慣が当人の性質になる」という意味ですが
この「性」を「セクシュアリティ」のことだと思っています
つまり、慣習が性を構築するのだということです

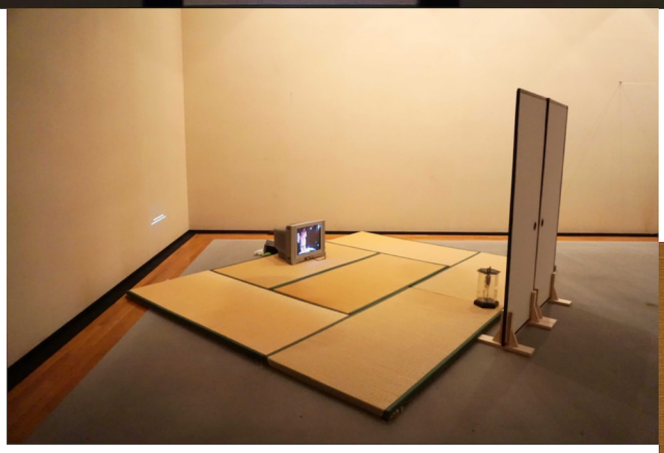
それでも身体は支配しきれずに、どこかで必ず「躓く」
なにもないところで躓くことはあれど
身体のないところで躓くことはありません

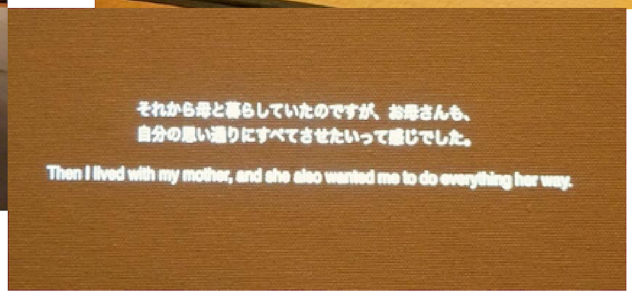
そんなままならない性と身体のための展示です
どうぞ足元にお気をつけてお越しくださいませ

愛媛県美術館と平和通りアートセンターの２会場で同時に開催した「性」がテーマの個展。
愛媛県美術館では《性分化質感》《共有された歴史》の２作品と愛媛県美術館との性的表現をめぐる議論の一部を展示した。そこから会場を移動して平和通りアートセンターに向かう。また、その道中で読むように伝えた手紙を渡し、移動の過程も作品に組み込んだ。平和通りアートセンターでは《濾過》《供養のために》の2作品を展示する。
とりわけ展示空間のもつ意味を意識した。保守的な愛媛県の中心地、コンパクトな都市空間、松山城堀之内公園、美術館とその他の展示室、そして私の展示、いくつかの内と外のレイヤーを移動しながら、そこにどのような気流が漂っているのかを感じ取ることを目指した。







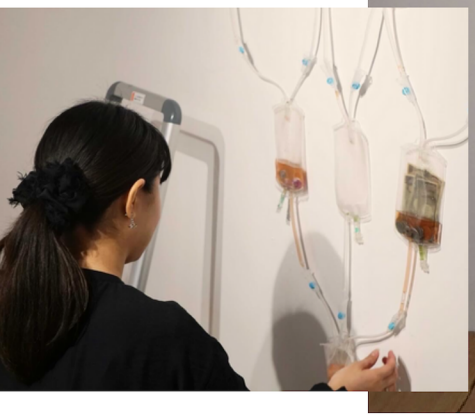


2023. 11. 1-6 愛媛県美術館　特別展示室
《共有された歴史》インスタレーション

《共有された歴史》では、畳の部屋と襖で開かれながら区切られている。ブラウン管テレビの中では、小さな箱に閉じ込められるように赤と黒のドレスを身にまとった二人が、ストリップ劇場を舞台にぎこちなくオクラホマミキサーの音楽にあわせてフォークダンスを踊る。それぞれの役割を交代しながら踊るとき、歩幅があわず、腕の回す位置がわからなくなり、２人は戸惑いながら、すこしだけ笑う。のぞき込むような画角の映像のなかで、次第に服を脱ぎ始め、性器があらわになることで、鑑賞者は二人が「男女」であることに気づく。全裸になった後も同じ踊りを繰り返し、最後は音楽が鳴り続けるなか、２人は立ち止まって手をつなぎ、画面の外を見つめ返すアップになり映像が終わる。

ブラウン管テレビの後ろには小さな文字が投影されている。そこには、家庭内暴力や性暴力をうけたナラティブが流れている。それらの文字は映像と関係があるのか明確にはわからない。それらのつながりを想像できるかもしれないが、不明瞭なものでつなぎ合っているため、鑑賞者が共感したり、理解することを受け付けない。それでもなにかがつながりあって、うごめいていることはわかる。その２人にしかわからないはずの私的な時間や言語、経験の「共有された歴史」が開かれたとき、暴力的なまでの憶測にさらされる。

性や二人の関係性についても同様の憶測が交錯する。「赤いドレスの男」と「黒いドレスの女」のように「男と女」、そこから想定される「異性愛と同性愛」と二元的に認識するが、それぞれのジェンダーアイデンティティを推測することはできない。制作しながら、二人だけの名付けようのない性や関係が存在するような感覚になり、性規範や自身の身体の歴史が躓きや揺らぎを生じさせることを捉えた。



2023.11.1-6　平和通りアートセンター
《濾過》参加型作品

《濾過》は、献血がモチーフになっており、指示書に従い、自身の血の色を自由に作る。それを注射器で上部から注ぐと、滴り落ちて輸血バッグに溜まっていく。バッグの中には、女の子と男の子のおもちゃが入っている。人形、ウルトラマン、銃、車、ガラスのヒール、鏡と注射器、お金、宝石、空白、最後は赤ちゃんの人形。血液は調節弁を操作することで流れや速さを調整できる。前の人の残った血と混ざり合ったそれは濁り、ビーカーに滴り落ち、保存用の輸血バッグに保管される。また、保存されている輸血バッグを光に照らすことで、一見濁っている液体が、実際は多様な色の差異をもつことがわかる。この作品は、《濾過》という名前だが、参加者が少なければ透明な色になり、多ければ濁った色になる。

私は、透明な単色とそれを区分して並べたグラデーションが嫌いだ。そこにはラベルがついてしまう。個人や集団的なアイデンティティの差異と境界を重視することは、だれにどのような権利が必要かを明確にするため、アクティビズムにおいて重要である。しかし、瞬間的に私たちは混ざり合い、なにものかわからないような感覚になることもある。それは、透明で純粋なものはなく、他者との関係性の中で流動的に変化していくという濁った希望だ。それでも、アイデンティティを完全に捨ててしまえば、現状の社会では権利を獲得できない。この葛藤や両義性と向き合いながらこの作品を制作した。

2023.12.8　愛媛県立今治南高等学校
《Overflowing》レクチャーとパフォーマンス

　母校である愛媛県立今治南高等学校で行ったレクチャーとパフォーマンスの作品。
　在校生の頃、教師のホモフォビックな発言に何度となく打ちのめされた。ささやかな復讐も兼ねたこのパフォーマンスは、性別二元論をテーマにしている。クィア理論において、性規範の逸脱や撹乱は外見的ジェンダーを基準にしてきた。二元的なジェンダーをドラァグクイーンのように着飾ることで誇張する試みは政治性をもつが、同時にエンターテインメントとして消費されてしまうこともあり、目の前の攪乱は自分から遠いものであると鑑賞者は認識してしまう。社会課題においても同様に、「彼らの問題」として当事者のみにその問題をおしつけ、周縁化することでマジョリティの平穏が保たれる。しかし、性規範は非当事者であるマジョリティの身体にも存在する。周縁化することで静けさを保つ身体に干渉し、零れ落ちる性のゆらぎを捉える。
　レクチャーでは、事前アンケートから得た学生のジェンダー観を基に、「男／女らしさ」やその規範が生み出す非対称な権力構造について学生と対話する。その後、Gender Revealという生まれた子供の性別を発表して祝う催事で用いる飾りを私が身にまとって踊る。そしてそれを囲む学生は、その身体が女性的だと感じたらピンク、男性的なら青の風船を挙げる。次に、学生と共に、椅子に座る、歩く、走るという行為を「男／女らしく」パフォーマティブに切り替えながら、そこで感じる体の違和感を確かめていく。そのジェンダーの違和感のある局部を、選択した色でマネキンに塗っていく。きわめて私的なそれぞれの身体の上で生じた現象を、個人ではなくジェンダー構造へとからかうように撹乱していく実践である。